

〈論文〉

『ヒューマン・ステイン』における “passing” と “political correctness”

松村延昭

Abstract

In Philip Roth's *The Human Stain* published in 2000, the singular life of Coleman Silk, who is a former classics professor and competent dean of faculty at Athena College, is depicted. His life which had seemed to leave nothing to be desired was ruined very suddenly. When he was calling the roll, he called out to the class about the two students who had not appeared in the class five times from the first, "Does anyone know these people? Do they exist, or are they spooks?" A spook means a ghost. Though Coleman insisted that he used the word for ghost, it has another meaning for a black person. He was accused of using a derogatory word and compelled to leave the college. There is controversy over whether he was insensitive in the use of word, or the adaptation of political correctness went too far in this case.

What makes the novel complicated and ironical is that Coleman, who was condemned for uttering a racially discriminatory word, was an African American with a pale skin color. Even though he was an excellent student academically and physically, his being an African American restrained him in a lot of ways. So he had wished to live a free life as an individual, not being restricted by the racial disadvantage. In following the life of Coleman Silk in *The Human Stain*, the problems of "passing" and "political correctness" in American society will be discussed in this paper.

はじめに

2000年に出版された『ヒューマン・ステイン』(*The Human Stain*)は、『アメリカン・パストラル』(*American Pastoral*)と『私は共産主義者と結婚した』(*I Married a Communist*)に続く、ザッカーマンという共通の視点人物をもつ、フィリップ・ロス(Philip Roth)のアメリカ3部作(American trilogy)のひとつである。『ヒューマン・ステイン』でザッカーマンは、マサチューセッツ州西部に位置するアシーナ大学の古典文学教授であり山を隔てた隣人であるコールマン・シルクの特異な人生を語っていく。

1980年代から10年間ほど学部長をつとめたコールマンは、斬新な大学改革を成し遂げ、彼の名は大学施設の名称となり永遠に讃えられるだろう、と言われるほどの功績を残してきた。しかし、授業中に放った一言が、彼の順風満帆であった人生を破滅に追いやる。学期が始まって6週目になっても出席しない二人の学生のことを、彼は“Does anyone know these people? Do they exist or are they spooks?”(6)とクラスに問いかけた。“spook”は黒人を意味する蔑称であり、黒人学生であった当該学生は、白人教授による差別発言があったと彼を学校当局に訴えたのだ。コールマンは“spook”には幽霊の意味もあり一度も授業に姿を見せない学生は幽霊のような存在であると、さらに二人の肌の色は知らなかったと弁明するが、学内のみならず地域の公聴会や面談でも糾弾され大学を去ることになる。

この小説は、“political correctness”を最優先する現代社会で言語使用に無神経であった白人男性の転落の物語であるとして、或いは人の人生を変えてしまう“political correctness”の過度の適用を指摘する物語として読むことができるのだが、今ひとつ、複雑でアイロニカルな要素も含んでいる。それはコールマンが所謂“passing”に成功した黒人であったことである¹。1964年に成立した公民権法以前の彼が育ったアメリカ社会で成功を目指す個人には、白人としてのアイデンティティーが必要であった。豊かな才能に恵

まれ、白人として通用する肌の白さを有していたコールマンは、ユダヤ系アメリカ人と偽りアシーナ大学での地位を獲得していたのである²。本論では、“passing”と“political correctness”というアメリカ社会で極めて重要な問題に焦点を当て、『ヒューマン・ステイン』を分析していく。

白い肌が意味するもの

1967年に公開された映画、『招かれざる客』(*Guess Who's Coming to Dinner*)は、その時点でも異人種間の結婚がいかに衝撃的であったかを物語っている。裕福な家の娘が、サンフランシスコの実家に恋人を連れて帰ってくる。彼はイェール大学出身の医学博士で、ジュネーヴに事務所をもち「世界保健機関」(WHO)の仕事をしている。ハンサムで博識、身なりもよく振舞いも言葉遣いも礼儀正しい。娘の結婚相手としてこの上ない好青年であるのだが、新聞社の主筆でリベラルな考えをもつ父親を含む周囲の者たちを驚愕させる唯一最大の懸念は、シドニー・ポワチエ (Sidney Poitier) 演じるプレントイス博士が黒人であったことだ。

黒人としては最高に色が薄いだけでなく、能弁で活動的、頭の回転が速く、しかも陸上競技のスターでありオールAの学生であったコールマンは、運命に抗うことなく、ワシントンD. C.にある黒人大学、ハーワード大学へと進学する。入学直後に友人とウールワースでホットドッグを食べようとランチ・カウンターへはいったとき、彼らは注文を拒絶されニガーと呼ばれる³。この一件は彼に凄まじい衝撃を与えた。これまでにも、彼がボクシングのコーチをしていた子供が彼の汗に触れることを嫌いジムをやめたり、事故にあった陸上部の先輩に献血を申し出て断られたりしたことはあったが、あからさまにニガーと呼ばれたことにより、彼は自分を待ち構えている運命を受け入れがたいと感じるようになる。ハーワード大学を1944年に中退して海軍入隊の志願書を書くとき、彼はボクシングのコーチであったドク・チズナーの、自

8 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

分が黒人であると言わなければよいのだ、“You’re Silky Silk. That’s enough.” (98)⁴というアドバイスを受け入れ、人種の欄に白人と記入し、白人としてのアイデンティティーを求め始める。

除隊後にニューヨーク大学に入学したコールマンは、北欧系の女性、ステイーナ・パルソンと愛し合うようになる。2年間つき合い、彼女は白人だけに囲まれて生きてきたため黒人のことをほとんど知らない、ゆえに彼女は人種的偏見をもっていない、また自分の家族に会えば彼女の家族と同様の上品な人たちだとわかるだろうと考えたコールマンは、彼女を母と兄のウォルト、妹のアーネスティンの待つ実家へと連れて行く。到着後も、ステイーナを含む全員が動揺の素振りもみせず、完璧な礼儀正しさを維持しながら食事は終わった。しかし、マンハッタンへ帰る電車の中で、ステイーナは頭をコールマンの肩にもたせかけて眠っていたが、ペンシルベニア駅に到着すると急に泣き崩れる。“I can’t do it!” (125) と叫び、ひと言の説明もなく、激しく喘ぎ咽び泣きながら電車から走り去ったステイーナは、その後彼に会おうとはしなかった。

異人種間の結婚を禁じる法律が完全に無効となったのは、「ラヴィング対ヴァージニア州裁判」(Loving V. Virginia) で、黒人女性ミルドレッド・ラヴィング (Mildred Loving) と白人男性リチャード・ラヴィング (Richard Loving) が勝訴した1967年である⁵。それまではアメリカ南部16州で、異人種間結婚禁止法 (anti-miscegenation laws) が有効であり、人種を超えた結婚は不正だと考える者が多くいた。コールマンがステイーナに出会った1948年では、彼女がコールマンの家族に会い驚愕したのも不思議ではない。コールマンは、“I can’t do it!” というステイーナの言葉には見識があったと思う。肌の色で人生が制限されてしまう社会で、自分の子供に理不尽な運命を背負わせたくないとするステイーナの発言は、感情に流されない妥当な決断であったとコールマンは理解を示す。

コールマンと同様に肌の色が薄かったウォルトは、公民権運動の活動家と

なり、黒人の人間としての権利を求めた。肌の色に左右されない人生を求めた点では、コールマンとウォルトは共通の目的をもっていたと言える。しかし、コールマンは社会を変えるのではなく、自分に与えられた不当な人生から脱出しようとする。自由な別個の運命を得るためには、大きな集団である白人が偏見を押しつけてくるのにも、小さな集団の黒人が「我々」となり倫理観を押しつけてくるのにも我慢がならなかった。“The objective was for his fate to be determined not by the ignorant, hate-filled intentions of a hostile world but, to whatever degree humanly possible, by his own resolve” (121). このように考えたコールマンは、人種の枠に束縛されず個人として自由に生きる道を選択したのである。

家族と絶縁し白人として生きることを決めたコールマンを、ウォルトは面罵し、母も“You think like a prisoner. You do, Coleman Brutus. You're white as snow and you think like a slave.” (139) と厳しく批判する。コールマン自身も、自分の選択にたびたび罪悪感を抱く。ステイーナと別れた数年後にコールマンはユダヤ系の女性アイリスと出会い、自分が黒人であることを告げずに結婚する。結婚を決めた理由のひとつが、彼女の曲がってもつれた髪の毛であった。彼女なら子供の髪が縮れ毛になっても説明がつくからだ。“... he had the definite impression that he had just chosen a wife for the stupidest reason in the world and that he was the emptiest of men.” (137)、と自己嫌悪に陥るコールマンであるが、アイリスが双子を出産したとき、彼の秘密の徴がどの子供にも現れなかったことに、自分はやったのだと溢れんばかりの喜びに浸る。高等教育を受け古典文学にも造詣の深かった父は、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』(*Julius Caesar*)の一節、“What can be avoided/Whose end purposed by the mighty gods?” (107-08) を好んで引用したが、コールマンは自分を待ち構えている運命を受け入れようとはしなかった。

アイリスの死後、71歳のコールマンは、34歳でアシーナ大学の用務員をし

10 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

ている女性、フォーニア・ファーリーと付き合う。結果的に、この交際が彼を死へと導くことになる。ベトナム戦争参戦による精神的後遺症 (Vietnam Syndrome) に悩む彼女の元夫、レスターが意図的に起こした交通事故により、コールマンとフォーニアは死亡する。葬儀にやってきたアーネステインは、ザッカーマンに長広舌をふるう。公立の学校で長く教師を勤め、黒人であることを卑下することも嘆くこともなく、父や兄と同様に人間としてのプライドをもって生きてきた彼女は、コールマンの生き方を批判的にみている。しかし彼女は、現在最高の大学に行き満額の奨学金を得ようとするなら、どんなに色が白くても黒人は自分が黒人ではないと決して言わないが、コールマンの青春時代には、そう言うことが有利だったのだろう、“Coleman couldn't wait to go through civil rights to get to his human rights, and so he skipped a step.” (327)、とコールマンの選択に理解を示す。この解釈は、現在多くの白人が皮膚の色は乗り越えがたい障壁ではない、時代とともに黒人に対する偏見は解消するだろう、と楽観的に考えるのと同じである。

アメリカの政治学者であるハッカーは、今日からあなたは黒人にならなければならない、その代償としていくら要求するかと白人学生に大胆に問いかけ、ほとんどの学生が年100万ドルと答えたと述べている (Hacker 31-32)。白人も白い肌の価値は、その額に達すると考えているわけである。かつてキング牧師が、“... my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.” と語った夢は、いまだ完全には実現していないと言える。

In most areas of employment, even after playing by the rules, you find yourself hitting a not-so-invisible ceiling. You wonder if you are simply corporate wallpaper, a protective coloration

they find it prudent to display. You begin to suspect that a “qualification” you will always lack is white pigmentation. (Hacker 35)

このようにハッカーは、他のアメリカ人が黒人に対してもつ負の固定観念は現在でも強く残っており、黒人は自分たちに欠けているのは白い肌の色 (white pigmentation) ではないのかと感じている、と述べている。今なお多発する警官の黒人に対する不当な暴行のニュースを耳にすると、黒人に対して周囲が抱く負のステレオタイプはなくなっていないことがわかる。映画『招かれざる客』の若いカップルは、厳しい障害が待ち受けているであろうこれからの人生に不安を抱くものの、果敢に未来へ向かって舵を切る。しかし、『ヒューマン・ステイン』における、父の教えに背き母を嘆き悲しませてまで下したコールマンの選択は、アメリカ社会で黒人として生きることの現実を如実に物語っているとと言える。

“political correctness” とアメリカ社会

“spook” の一件に関してコールマンは、馬鹿げた告発だと一笑に付す。辞書における “spook” の第一義的意味は「幽霊」であり、黒人に対する蔑称の意味も確かにあるのだが、それは古い用法である。また、文脈的にも、6回の授業に一度も出席しない顔も見ただことのない学生に言及するのに、黒人の意味で使うわけがない、とコールマンは強く主張する。確かに、OED を含む多くの英語辞書で “spook” は最初に “a ghost”、その後 “a spy” や時代遅れの侮辱的な意味として “a black person” と掲載されている。同僚たちも自分と同じように解釈して当然だと彼は考えるが、ほとんどの同僚はコールマンの非を追求するか、この問題への関わりを避けようとする。コールマンは学部長として、同じ講義や研究を繰り返す老教授たちを

12 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

早期退職に迫いやり、野心的な若手教員を積極的に採用し、カリキュラムを大幅に変えてきた。しかし、この思い切った改革は多くの同僚たちの反感を買っていた。また、彼が採用した黒人教員のハープ・キープルも、“I can't be with you on this, Coleman. I'm going to have to be with them.” (16) と、現代のアカデミックな世界で、人種差別につながる微妙な言葉を発した者を弁護することの難しさを語っている。

コールマンの死後ではあるが彼に共感し、“political correctness”を過度に適用する現代社会を批判するのはアーネスティンである。彼女は、高等教育機関でこのような道化的なことが行われているのか、人は怯えながら言葉を口にしなければならぬのか、と言論の自由を保障する合衆国憲法修正第一条を引用して憤る。また、「黒人歴史月間」(Black History Month)⁶にチャールズ・ドリュー(Charles R. Drew)⁷について高校生に講読を強いることにも苛立っている。彼女は、血液保存に関する彼の功績は取り立てて2月に教える内容ではなく、健康について学ぶおりに彼の名前は出すべきだと言う。勉強のできない生徒が、自分たちが悪いのではなく指導要領が教師の教え方が悪いのだ、と堂々と自らの能力のなさを特権のように主張することを許す今の教育には問題があるとも言う。長年高校の黒人教師として過ごし、人として威厳をもち自立して生きることの大切さを父から教えられたアーネスティンは、黒人であることが特別な何かを意味することは不自然であり、弱者への行き過ぎた援助自体が弱者の自助努力を弱めてしまうと保守的な意見を述べる。

しかし、コールマンを告訴した学生のひとり、トレイシー・カミングズは責任転嫁の甚だしい、どうしようもない怠惰な学生だったのだろうか。コールマンが採用したにも関わらず、何かと彼とは意見が対立することの多いフランス文学の若手教授、デルフィーヌ・ルーのところへ、“spook”の発言を耳にしたトレイシーは動転し泣きながら走っていった。コールマンとの個人的対話では解決できないと考えたルーは新学部長へと話をもっていき、

“spook”問題は全学的、さらにはコミュニティ全般へと広がっていった。最終的にコールマンは大学を辞職するのだが、元々精神状態の不安定であったトレイシーは、白人教授の偏見が他の学生にも伝播していると恐れ、授業をすべて落とし退学している。“spook”のひと言が契機となり、トレイシーが大きなダメージを受けたことは否めない。ルーはトレイシーの複雑な家庭環境を引き合いに出し、人生を改善していこうという彼女の意思を理解し、彼女を見捨てずに育てていくべきであったとコールマンの責任を追求する。

フランスの特権階級出身で、名門国立高等学校の後イェール大学で学んだルーは、友人たちがアシーナ大学で教えるのはもったいないと思うほどの素晴らしい業績を誇る教員である。ルーは常に慇懃無礼な態度で接してくるコールマンに我慢がならなかった。彼の辞職後、彼とフォーニアの関係を知り、ルーは以下の匿名の手紙を彼に送りつける。

Everyone knows you're
sexually exploiting an
abused, illiterate
woman half your
age. (38)

二人の関係を深く知ることもなく、読み書きができず不幸な人生を送ってきた自分の半分ほどの年齢の女性を、コールマンは性的欲望のために利用している、と憤ったルーは自分の感情を抑えることができず二度も同じ手紙を送る。またザッカーマンは、ルーの心情を次のように述べる。“For all that she could not bear him, she also couldn't bear that the academic credentials that so impressed other of her Athena colleagues hadn't yet overwhelmed the ex-dean [Coleman]” (185). 誰もが認めてくれている自分の学問的優越を軽視するコールマンは、ルーにとって許す

14 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

このできない存在であった。教育的観点からは、トレイシーに対するルーの意見は当を得ており、コールマンはもっと慎重に“spook”問題に対処すべきであったが、結果的に彼を学内から排除することに成功したルーは、この問題を彼との対立における武器として用いたとも言えるだろう。

コールマンがトレイシーの人種的背景を知らなかったと言うのは偽りではないだろうが、できの悪い学生だと見なし苛立ち発した“spook”には、彼の侮蔑的感情が含まれていたことも否めない。彼は言葉の選択に無神経であった。自分が意図していなくても、使った言葉が差別的であり相手に不快感を抱かせるようなら、それは“political correctness”の範疇からはみ出した表現であり、その言葉の使用者は他者の感情に対して配慮が足りなかったとされるのが現代のアメリカ社会である。ましてやコールマンは、父から正確で上品な言葉遣いを教え込まれている。彼は「犬」と呼ぶことさえ正され、「ドーベルマン、ビーグル、テリア」と言うように教えられて育った。彼が思わず“I swear to you.” (97) と言ったおりにも父は、“Don’t say that. Don’t say, ‘I swear to you.’” (97) と、年長者に対するそのくだけた話ぶりを即座に咎める。さらに、コールマンは言葉に対して繊細な意識をもって然るべき古典文学の教授である。ショスタックは以下のように彼を批判する。

In the academic climate in which Coleman teaches, where everyone is terribly sensitized to the possible racialized significations of their language, Coleman cannot with impunity presume to use such a burdened term innocently. (Shostak 156)

コールマンの言い分は至極妥当だと思えるが、学生の感性に対して軽率で不注意な言葉遣いであったことも事実である。

言葉遣いの許容範囲を決めるのは、英語圏に居住している者にとっても難しいが、“spook”の発言にトレイシーたちはすぐに反発したし、コールマ

ンは黒人に対する蔑称としての意味を知っていた。しかし、コールマンの文脈を考えてくれとの弁明にも納得がいく。“political correctness”の話題が出る時、よく引用されるのがジョージ・ブッシュ (George Bush Senior) 元大統領が1991年にミシガン大学の卒業式で行ったスピーチである。

Ironically, on the 200th anniversary of our Bill of Rights, we find speech under assault throughout the United States, including on some college campuses. The notion of political correctness has ignited controversy across the land. And although the movement arises from the laudable desire to sweep away the debris of racism and sexism and hatred, it replaces old prejudice with new ones. It declares certain topics off-limits, certain expression off-limits, even certain gestures off-limits.⁸ (Aufderheide 227)

アメリカ合衆国憲法修正条項の1条から10条までは人権規定 (Bill of Rights) と称され、1条は国民の言論や信教等の自由を保障している。ブッシュは、“political correctness”の概念がある意味、言論の自由を侵害していると述べている。ブッシュが“political correctness”主唱者を“they”で表現し、“we”である自分たちアメリカ国民の部外者であるように分断しているとの批判もあるが (Weir 72)、“political correctness”は新たな形態の検閲ではないのかとのアーネスティンの意見は、ブッシュのような多くの保守的人物に共有されている。問題なのは、“... it is impossible to define ‘political correctness’ in terms of a coherent ideology that would include definitions and uses from both the Left (in a defensive way) and the Right (accusatory).” (Barnard 110)、とバーナードが結論づけているように、どの言葉がどの文脈で politically incorrect となるのかの明確な規定がないことである。また規定があったと

16 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

しても、それは時と共に変化していく⁹。イエール大学元学長のベノ・シュミット (Benno Schmidt) は、

On some other campuses in this country, values of civility and community have been offered by some as paramount values of the university, even to the extent of superseding freedom of expression. (Aufderheide 57)

と述べ、そのような曖昧な規範の拡大解釈は大学に危機をもたらすと警告している。

“political correctness”を1950年代のマッカーシズムに喩える批評家もいる。冷戦時代に、薄弱な根拠でもってソ連のスパイだと嫌疑をかけられ、多くの学者や演劇人等が今まで積み上げてきたキャリアを奪われ追放された事件である。傲慢な態度で強く反発して周囲の反感を強めた感もあるが、“spook”がコールマンのすべてを否定して大学から追放するに値する非人道的言葉だったのかは疑問である。ヒューズは以下のように述べている。

Thus a person may lead a life of complete probity and intellectual rigor, but be destroyed socially and professionally by being denounced for simply using “politically incorrect” language and thus labelled as a *racist*, *sexist*, *homophobe*, or *fascist*, despite the fact that these terms are problematic both in definition and specific application. (Hughes 295)

一度“politically incorrect”のレッテルを貼られると、その人物は積み上げてきたキャリアを剥奪され、社会から抹殺されて然るべきであろうか。ブッシュが言うように、人種差別や性差別、ヘイトスピーチを一掃しようとするのは称揚すべき試みで、異議を唱える者はほとんどいないであろう。しかし、

言葉の是非は恣意的に判断されることもあり、行き過ぎた“political correctness”の適用は古い偏見を新たな偏見に置き換える可能性がある、とのプッシュの指摘も間違っていない。

ロスが2012年、コールマンのモデルは『ニューヨーク・タイムズ』の文芸批評家、アナトール・ブロヤード (Anatole Broyard) だとするウィキペディアの誤った記述を正すため、“An Open Letter to Wikipedia”と題した公開書簡を雑誌『ニューヨーカー』に掲載して、実際のモデルは彼の友人でありプリンストン大学社会学部教授であったタミン (Melvin Tumin) だと述べている。タミンが事件に巻き込まれた状況を、ロスはほとんどそのままコールマンに用いている。“Does anyone know these people? Do they exist or are they spooks?”もタミンのクラスでの発言である。タミンは人種問題の専門家であり、公民権運動の活動家やリベラルとされる政治家からの信頼も得ていた著名な学者であった。ロスは公開書簡の中で、以下のようタミンを擁護している。

But none of these credentials counted for much when the powers of the moment sought to take down Professor Tumin from his high academic post for no reason at all, much as Professor Silk is taken down in *The Human Stain*. (2)

ロスは「魔女狩り」(a witch hunt) という言葉まで使い、タミンは“the innocent victim of institutional harassment” (3) だったと言う。コールマンのケースと異なるのは、何度もの宣誓証言を繰り返し数ヶ月を経た後、タミンのヘイトスピーチの嫌疑は晴らされた点である。一方コールマンは大学から追放され、愛人の元夫が起こした自動車事故により恥辱に塗れた死を迎える。

悲惨な運命に至るコールマンの明確な過ちは、人種差別的意味を含蓄する

18 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

語を無神経に使用したことである。しかし、タミン自身が最終的に潔白だと認定されたように、傲慢に自己主張をした点はマイナスであったが、コールマンも許される可能性はあったであろう。コールマンが犯したより大きな罪は、彼が“passing”を成就させようとしたことである。結婚したコールマンはアイリスに、両親は死に兄弟姉妹もいないと告げる。そのことを聞いた母は、自分はベビーシッターになるくらいしか孫の顔も見ることができないのかと嘆くが、コールマンは、

But only through this test can he be the man he has chosen to be, unalterably separated from what he was handed at birth, free to struggle at being free like any human being would wish to be free. (139)

と考え、個人の自由を求めて家族を捨て去る。また、除隊後ニューヨーク大学に入学したコールマンは、ボクシングで実力差のある黒人選手と対戦したとき、観客を喜ばせるため、興行主から4ラウンド程度で相手を倒すように命じられる。しかし、1ラウンドでノックアウトしてしまい、理由を聞かれて“Because I don't carry no nigger.” (117) と返答する。“nigger”はフルスペリングを避け“N-word”と代替え表記されることも多い黒人に対する蔑称である。“When a white person voices it [nigger], it becomes a knife with a whetted edge... This word has the force to pierce, to wound, to penetrate, as no other has.” (Hacker 42) と言われるほど、それは黒人を傷つけ侮蔑する言葉である。その言葉を平然と使い、コールマンは自らの人種を蔑むことで支配的人種へとより近づいていったのである。

おわりに

ブルーム (Harold Bloom) は、ロスがノーベル文学賞を獲得できなかった

た理由を、“He’s not terribly politically correct, you know. And they [the Nobel Prize people] are.” (Senior) だと語っている。このように、“political correctness”に取り憑かれたとされる人たちを、“the politically correct inquisitors” (Wood 74) や“a politically correct mob” (Charles 18) と呼び、社会全体が“politically correct”であろうと過敏になり過ぎていることへの批判を『ヒューマン・ステイン』から読み解く批評家も多々いる。プリンストン大学でタミンの同僚であったショーウォーター (Elaine Showalter) も『ヒューマン・ステイン』に言及して、“The tragic downfall of his protagonist, Professor Coleman Silk, is the result of his ‘unwarranted,’ ‘heinous, needless persecution’ for these words.” (Showalter) と、コールマンに同情を寄せている。確かに、“Consider the context: Do they exist or are they spooks? The charge of racism is spurious. It is preposterous.” (7) とコールマンが声高に訴えるように、“spook”の一件が彼を社会から抹殺してしまうほどの重罪であったのかとの疑問もわく。

コールマンのより深刻な罪は、自分の家族と人種を裏切ったことにある。彼の秀でた能力と肌の色からすると、人種に関わらず個人として自由に生きたいと願うのも当然である。しかし、自分の人種を蔑視し、自分の子どもの肌の色や頭髪の縮れに怯えながらの仮面を被っての人生は決して誉められたものではない。彼の不名誉な人生も、自らが蒔いた種だと言えるかもしれない。コールマンと同様に白い肌をもっていたウォルトが、公民権運動の時代に黒人として誇りをもち差別と戦ってきたのとは異なり、コールマンは人種の枠から逃亡した。しかし、そのように彼を駆り立てたアメリカ社会に今なお潜在する人種偏見を視野に入れると、彼も犠牲者だったと言えるのかもしれない。『ヒューマン・ステイン』はアメリカ社会で黒人として生きることの現実を明示すると同時に、言葉に敏感すぎる現代社会に対する警告の書としても読むことができるのではないだろうか。

注

- 1 “passing”とは、ある人種的・宗教的グループに属する者が、他のグループの一員であるかのように見せ掛けることを意味する。とりわけ、一滴でも黒人の血が混じった者はいくら肌の色が白くても黒人である、と規定するワン・ドロップ・ルール（one-drop rule）が支配的であったアメリカ社会で容姿が白人として通用する黒人には、“passing”を試みて抑圧された境遇から抜け出そうとする者が多くいた。“passing”はマーク・トウェインの「まぬけのウィルソン」（“Pudd’nhead Wilson”）やケイト・ショパンの「デジレの赤ん坊」（“*Désirée’s Baby*”）でも扱われているトピックで、近年でも、ネラ・ラーセンの小説を映画化した『白い黒人』（*Passing*）が2021年に公開された。また物語の中でも、コールマンの妹アーネスティンは、公民権運動以前の時代に“passing”は珍しいことではなかったとして、エリア・カザン監督の映画『ピンキー』（*Pinky*）を例にあげている。
- 2 コールマンは生後間もなく割礼を受けていた。ユダヤ人医師の下で看護婦として働いていた母親が、割礼は衛生的によいとの説を信じていたからである。
- 3 ウールワースは日用雑貨等を扱うアメリカのチェーン店であった。当時店内のランチカウンターは人種隔離政策により白人専用となっていたが、1960年、ノースカロライナ州グリーンズボロのウールワース・ランチカウンターに4人の黒人学生が座り注文をした。4人は注文を無視され嫌がらせを受けながらも閉店まで居座った。この行動により、シットイン（sit-in）は公民権運動の有力な抗議手段として広まり、ウールワースは同年、人種隔離の方針を撤廃した。
- 4 シルキー（Silky）はコールマンの高校時代のニックネーム。
- 5 1958年にリチャードとミルドレッドのラヴィング夫妻は、人種隔離政策を推進するために1924年にヴァージニア州で制定された反異人種間混交規定に違反したとして、1年間の懲役刑を科されるが、1967年6月12日に、連邦政府最高裁判所は夫妻に対する有罪判決を覆す。6月12日は異人種婚が公式に認められた記念すべき日であり、「ラヴィング・デー」（Loving Day）として祝されている。また、近年の同性婚を扱う裁判では、夫妻の裁判に言及されることも多い。
- 6 アメリカでは1976年より、2月が「黒人歴史月間」と定められている。2月がエイブラハム・リンカンとフレデリック・ダグラスの誕生日だからである。例年2月には、黒人の歴史ドラマが特集としてテレビで放映されたりする。
- 7 ドリューは黒人の外科医で、輸血用血液が保存中に凝固しない処理方法を改善し、それにより、第二次世界大戦中に多くの連合軍兵士の命が救われたと言われている。しかし、ドリューは1950年まで続いた輸血における人種隔離政策に反対して、1942年にアメリカ赤十字血液銀行での職を辞した。

- 8 ブッシュは“political correctness”の主唱者を、ジョージ・オーウェル (George Orwell) の小説に登場しそうな者だとも言っている。オーウェルはイギリスの小説家で、1949年に出版した『1984年』(*Nineteen Eighty-Four*) では、1984年の世界は3つの全体主義の国に分割され、政府による監視・検閲体制により、国民の自由はすべての面で奪われてしまう恐怖の近未来を描いた。
- 9 現在 Negro は一般に使用を避けるべき差別的用語と認識されているが、1963年の“I Have a Dream”スピーチで、キング牧師は15回黒人を Negro で表現している。

引用・参考文献

- Aufderheide, Patricia, ed. *Beyond PC: Toward a Politics of Understanding*. Graywolf, 1992.
- Charles, Ron. “Rage Is All the Rage in America.” *Christian Science Monitor*. 11 May, 2000.
- Donnelly, Kevin. *A Politically Correct Dictionary and Guide*. Connor Court Publishing, 2019.
- Hacker, Andrew. *Two Nations: Black and White, Separate, Hostile, Unequal*. Scribner’s, 1992.
- Hentoff, Nat. “‘Speech Codes’ and Free Speech.” *Beyond PC: Toward a Politics of Understanding*. pp.50-58.
- Hughes, Geoffrey. *Political Correctness: A History of Semantics and Culture*. Wiley-Blackwell, 2010.
- Roth, Philip. *The Human Stain*. Houghton Mifflin, 2000.
- Shostak, Debra. *Philip Roth: Countertexts, Counterlives*. U of South Carolina P, 2004.
- Weir, Lorna. “PC Then and Now: Resignifying Political Correctness.” *Beyond Political Correctness: Toward the Inclusive University*. ed. Stephenricher et al. U of Toronto P, 1995. pp.51-87.
- Wood, James. “The Cost of Clarity.” *New Republic*. 17 Apr. 2000: pp.70-78.
- Barnard, Lianne. “Is Philip Roth against ‘Political Correctness’?: ‘Whiteness’ as Desired Norm and Invisible Terror in *The Human Stain*.” *Brno Studies in English*, vol.43, no.1. 2017: pp.107-25.
(https://digilib.phil.muni.cz/bitstream/handle/11222.digilib/13708p8/1_BrnoStudiesEnglish_43-2017-1_8.pdf?sequence=1) Accessed 27 Mar. 2022.

22 『ヒューマン・ステイン』における“passing”と“political correctness”

Roth, Philip. “An Open Letter to Wikipedia.” *The New Yorker*, 6 Sept. 2012.

〈<https://www.newyorker.com/books/page-turner/an-open-letter-to-wikipedia>〉 Accessed 27 Mar. 2022.

Senior, Jennifer. “Philip Roth Blows Up.” *New York Magazine*, 1 May, 2000.

〈<https://nymag.com/nymetro/arts/features/2983/>〉 Accessed 27 Mar. 2022.

Showalter, Elaine. “An ‘Initiating Incident.’” *Princeton Alumni Weekly*. 21 Mar. 2018.

〈<https://paw.princeton.edu/inbox/initiating-incident>〉 Accessed 27 Mar. 2022.

アウフデルハイデ、パトリシア『アメリカの差別問題：PC（政治的正義）論争を踏まえて』脇浜義明 訳 明石書店、1995年

杉澤伶維子『フィリップ・ロスとアメリカ：後期作品論』彩流社、2018年

ハッカー、アンドリュー『アメリカの二つの国民：断絶する黒人と白人』上坂昇 訳 明石書店、1994年

ロス、フィリップ『ヒューマン・ステイン』上岡伸雄訳 集英社、2004年